

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號一第 卷二十四第

行發日一月一年一十和昭

新年特別號

恩給年金賞與の課税	法學博士 神戸 正雄
經濟社會學の概念	文學博士 米田 庄太郎
費用としての勢力	文學博士 高田 保馬
幕末諸藩の開國思想	經濟學博士 本庄 榮治郎
經濟學史の基本問題	經濟學博士 石川 興二
遼瀋處理問題	經濟學博士 八木 芳之助
表式調査に就いて	經濟學博士 蜷川 虎三
戰前戰後の獨逸社會事業	經濟學士 中川 與之助
原料仕入に於ける基本問題	經濟學士 大塚 一朗
利潤論の修正	經濟學士 柴田 敬
支那の幣制改革と其の意義	經濟學士 松岡 孝兒
日本資本主義成立過程の一考察	經濟學士 堀江 保藏
中立貨幣に於ける貨幣數量	經濟學士 中谷 實
再保險の發展と保險企業結合	經濟學士 佐波 宣平
都市と農村との對立に關するアダム・スミスの見解	經濟學士 白杉 庄一郎
商業機能學說の發展	經濟學士 堀 新一
臺灣の酒專賣	經濟學博士 汐見 三郎
國民主義者の私企業觀	經濟學博士 作田 莊一
植民地再分配論の種々相に就て	法學博士 山本 美越乃
貿易商品の集中性と分散性	經濟學博士 谷口 吉彦
我が國の銀行預金	經濟學博士 小島 昌太郎
新着外國經濟雜誌主要論題	

(禁轉載)

經濟社會學の概念

米田庄太郎

目次

- 一、經濟社會學の概念問題、二、社會學と經濟學との關係、三、ジムメルの社會學概念の誤解
- 四、限界効用説の社會學的分析、五、マックス・ウェバーの經濟社會學の概念の評價

一、經濟社會學の概念問題

千八百八十年代、殊に九十年代に入りてより、歐米諸國に於て社會學の研究が大に勃興し來るにつれて、社會現象の何れの部類、社會的現實態の何れの範疇も、根本的には社會學的に、或は社會學的方法に於て、研究されねばならないと云ふ様な考へ方が、廣く一般に流布して來た。かくて人間の經濟生活を社會學的に研究するものとして經濟社會學、又法律生活を社會學的に研究するものとして宗教社會學と云ふ様に、人間の社會的生活の諸方面或は諸範疇を、夫れ夫れ對象として社會學的に研究するものとして、諸般の何々社會學なるものが、新たに唱へ出されて來たのである。併し經濟生活に就ては經濟學、法律生活に就ては法律學、宗教生活に就ては宗教學と云ふ様に、社會的生活の諸方面或は諸範疇を、夫れ夫れ對象とする特定の學問が、既に長い以前から發達して居たのであるから、其等の新たに唱へ出されて來た何々社會學なるものの概念は、從來の夫れ夫れの特定の學問の概念に對して、例へば經濟社會學の概念は從來の經濟學の概念に對して、如何に規定される可きかは、學問論上重要な問題となるのであるが、然るに此の問題に對する諸家の所説は、甚だ曖昧であつた、又今日に於ても尙ほ同様である。それで私は早くから社會學方法論上、其等の新しき何々社會學なるものの概念を、判然又嚴密に學問論的に規定することが、甚だ肝要であると考へ、其等の何々社會學に關する諸家の所説を、學問論上一々批判的に吟味して、其等の何々社會學なるものの學問論的正體を見究める爲めに、カナリ力を注いで居

たのであるが、併し特に夫れに就て私の考へを公にする機會がなかつたのである。然るに近頃或新進の經濟學者が、經濟社會學に關する著作に着手したいつもりであるとして、夫れの概念を如何に規定す可きかに就て、私の意見を求められたので、私の考へをザット一般的に述べて置いたのであるが、併し右の經濟學者と同様に經濟社會學なるものの概念規定に就て、疑問を抱いたり、又は迷ふて居られる人々は少なくあるまいと思はれるから、本論文に於て紙面の許す限り、簡單ながら出来るだけ組織的に、此の問題に關する私の考へを述べることは、敢て無用ではあるまいと思はれる。

今我が國語の文法上から見ると、經濟社會學と云ふ語は、少なくとも二通りの意味に解し得られる。其の一は經濟社會の學と云ふ意味にして、其の二は經濟の社會學と云ふ意味、即ち上に述べしが如くに、經濟を社會學的に研究するものと見る意味である。併し第一の意味、經濟社會の學即ち經濟社會を研究する學と云ふ意味では、經濟社會學なるものは、今日では一般に單に經濟學と稱せられて居るものと異ならない。と云ふのは一般に單に經濟學と稱せられて居るものも、決して孤立せる個別個人の經濟生活を研究するものでなく、社會に於て生活する人々の經濟生活、つまり經濟社會に於ける人々の生活を研究するものであるからである。されば經濟社會の學と云ふが如き意味に於ては、一般に單に經濟學と稱せられて居るもの以外に、經濟社會學なるものは存在しない。かゝる意味にては經濟社會學と云ふ語は、一般に單に經濟學と稱せられて居るものの意味を、表面上少しく明白に表示するだけに過ぎない。かくてかゝる意味に於ては、經濟社會學の概念は學問論上別に問題とするに足らぬ。精々の處で、單に技術上の問題となるだけである。即ち單に經濟學と云ふよりは、經濟社會學と云ふ方が、一層適當であるのではないかと云ふ

ぐらひのことが、問題となるだけである。

されば經濟社會學の概念が、學問論上一の重要な問題となるのは、上に述べしが如き第二の意味に於て之を解する場合、即ち經濟社會學とは經濟を社會學的に研究するものであると、解する場合に於てあることは明かである。換言すれば經濟社會學とは人間の經濟生活を社會學的に研究するものであると解する場合に、此處に夫れ概念を如何に規定す可きかと、學問論上重要な問題となるのである。そうして今日我國語に於て經濟社會學と云ふは、つまり上に述べしが如き意味にて用ひられて居る外國語、即ち *Wirtschaftssoziologie* とか、*la sociologie économique* とか、*economic sociology* とか云ふ外國語の譯語であると思はれるので、かくて今日我國に於て經濟社會學と稱せられて居るものは、一般に第二の意味を與へられて居るもの、即ち經濟を社會學的に研究することを意味するものと、解して置いて間違はないと思はれる。

却說經濟社會學とは、上に述べし如くに、經濟の社會學的研究を意味するものとして、先づ夫れ概念を最も一般的に規定して置いて、それより學問論上嚴密に、夫れ學問論的性質を決定しようとするに於ては、此處に種々な問題が起つてくるのである。先づ第一に注目す可きは、社會經濟學の學問的實質に關する問題、即ち經濟社會學は社會學的に、或は社會學の方針に於て、經濟を研究するものであると云ふことに、如何なる學問論的意義が認めらる可きかと云ふ問題である。そうして私は純學問論的に考へて、之れに少なくとも左の如き三つの意義を認めることが、

論理的に可能であると思ふ。

(1)人間の經濟的生活は種々な方針に於て研究されて居るが、併し只夫れを社會學の方針に従ふて、或は社會學的に、研究するに於てのみ、吾人は夫れの眞義を根本的に且つ十分に、理解或は了解することが出来るので、かくて眞の科學としての經濟學なるものは、經濟社會學の外に成立し得ないと見ること。

(2)人間の經濟的生活の如き甚だ複合的な人壽現象或は社會現象は、吾人夫れを夫れの全體に於て根本的に且つ十分に理解或は了解する爲めには、可能的なあらゆる方面から研究せねばならぬが、併し先づ社會學の方針に於て研究することは、最も肝要であるから、かくて經濟社會學は經濟學の中心的部分であると見ること。

(3)人間の經濟生活の如き甚だ複合的な社會現象は、可能的な一切の方針に於て研究されねば、到底夫れの眞義は根本的に且つ十分に理解或は了解されることは出来ないので、吾人は何れの方針に於ける研究をも特に偏重してはならない。かくて經濟社會學は勿論經濟學上重要な一方針であるが、併し他の諸方針以上に重要視する可きものではなく、そうして總ての方針は同等に重要視する可きもの、夫れの重要性に於ては同位的なものと思ふべきであるかと考へること。

私は經濟社會學の學問的實質或は學問論的意義に關する問題に就ては、少なくとも右に述べしが如き三つの見解が、論理的に可能であると考へるのであるが、實際に於て經濟社會學を重要視す

る人々の見解を、學問論的に一々吟味して見ると、夫れは少なくとも大體上、右の三つの見解の何れかに歸着するもの、又は歸着す可きものと思はれる。

次に注目す可きは經濟社會學の學問的所屬性に關する問題である。そうして此の問題に關しても、私はヤハリ少なくとも左の如き三つの見解が、論理的に可能であると思ふ。

- (1) 經濟社會學は社會學の一分科、或は社會學的一科學であると見ること。
- (2) 經濟社會學は經濟學の一分科、或は經濟學的一科學であると見ること。

(3) 經濟社會學は社會學と經濟學との交叉から成立する、一の獨立な科學であると見ること。

私は社會經濟學の學問的所屬性に關する問題に就ても、少なくとも右に述べしが如き三つの見解は、論理的に可能であると考へるが、實際に於ても經濟社會學の成立を主張する人々の説は、結局は右の三つの見解の何れかに歸着するもの、又は歸着す可きものと思はれる。併し夫れと同時に私は此の問題の根抵に、一の先決問題が存立して居ると思ふ。夫れは即ち社會學と經濟學との關係の問題である。要するに私は先づ社會學と經濟學との關係が、判然又嚴密に決定された後、此處に經濟社會學の學問的所屬性の問題も、亦夫れの學問的實質或は學問論的意義の問題も、始めて正當に解決されるのであると考へて居る。それで私は是れより、社會學と經濟學との關係は如何に決定さる可きかと云ふ問題を中心として考究し、其の中に含めて經濟社會學の學問的所屬性の問題、及び學問的實質或は學問論的意義の問題を論究したいと思ふ。併し限られたる頁數の範

圍内に於て論述しなければならぬのであるから、勿論極一般的に論述するだけに止めざるを得ない。

二、社會學と經濟學との關係

コントが社會學を始めて一の獨立な學問として、學問論的に建設せんとした際、彼は彼が一の獨立な學問として新たに建設しようとする社會學と經濟學との關係を、既に重要な一問題として考へて居たことは、彼が最初にサン・シモンに送つた書簡や、彼がサン・シモンとの學問的或は思想的關係を清算するに至つた事情などから推して、明かに察知し得られるのである。そうして彼は社會の學問的研究に於て、先づ全體の考察を大に重要視して、彼の社會學を建設せんと企て、眞に社會の學としては、根本的には只社會を全體的に考究する社會學が成立し得るだけであつて、社會生活の一方面に過ぎない經濟生活を對象とする經濟學の如きは、精々の處で只社會學の一派生的科學として、成立し得るに止まるものの如く論じたが爲めに、從來經濟學は一の獨立な學問、殊に最も重要な社會的學問であるが如くに考へて居た經濟學者の間に、不快な又は不安な念を起させたと思へ、其の後コントの社會學概念や、單一社會學說と稱せられるもの、即ち社會に關する眞に根本的な學問としては、只社會學が存立するだけであると見る說に對する反對は、殊に經濟學者の間から猛烈に起つて居たと思はれる。併しそうであるだけ又、社會學と他の社會

科學との關係の問題は、社會學と經濟學との關係の問題として、經濟學者の方面から、最も詳しく又深く論究されて居ると思はれる。かくて社會學方法論の發達に對して經濟學者の貢獻せるものは、少なくないのである。(此の事に就ては本雜誌昭和四年八月號に於ける拙稿「限界經濟學と制度經濟學」を參考)

此の短論文の一部分として、社會學と經濟學との關係に關して、社會學者の方面及び經濟學者の方面から提出された諸見解を、一々批判的に考察して愚見を述べると云ふことは、到底不可能であるから、只ホンの一般的に概論するだけに止めざるを得ないが、要するに私の見る處によれば、其等の諸見解は少なくとも根本的には、左の四部類に大別し得られると思ふ。

(1) 社會的生活或は社會的現實態を對象とする一切の學問を、社會學と總稱し、そうして社會的現實態全體の根本的一般的方面及び包括的一般的方面を共に研究するものを、一般社會學と稱し、之れに對して社會的現實態のもろゝの特殊の方面、例へば經濟的、法律的、政治的、道德的、宗教的、藝術的等々の諸方面を、夫れ夫れ對象とするものを特殊社會學として、何々社會學と稱しようとする見解。かくて此の見解に於ては社會經濟學の外に經濟學なるものは存立せず、又經濟學は經濟社會學として、始めて眞の學問として建設されるものと考へられて居る。そうして經濟社會學なる語は、かゝる見解を保持する社會學者によりて、始めて造られたものである。

(2) 社會的生活或は社會的現實態を對象とする一切の學問或は科學を、社會的學問或は社會科學と總稱し、そうして社會的現實態の根本的一般的方面を、又は之れと包括的一般的方面とを合せ

て、研究するものを一般社會科學と稱し、社會學とは即ち此の一般社會科學を意味するものであると解し、之れに對して社會的現實態の特殊の諸方面を夫れ夫れ對象とするものを特殊社會科學と總稱し、經濟學、法律學、道德學、政治學、宗教學、藝術學等々は、總て夫れ夫れの特殊社會科學であると見る見解。此の見解に於ては、一の特殊社會科學としての經濟學の外に、經濟社會學なるものは存在しない。されば此の見解を保持する人々にして、時には經濟社會學と云ふ様な言葉を使用する場合があつても、夫れは只何かの便宜上かゝる言葉を使用して居るだけであつて、決して一の特殊社會科學としての經濟學の外に、經濟社會學と云ふ様なものが、存在すると云ふ意味ではないと思はれる。

(3) 社會的生活或は社會的現實態の全體を、包括的一般的に研究する科學と云ふ様なものは成立し得ない。かゝる研究は只哲學的一學科として建設し得られるだけである。そうして社會的現實態を對象として、現實に成立して居る、又は成立し得る科學と云へば、何れも只社會的現實態の何れかの特殊の一方面を對象とするものである。されば社會的現實態の全體を一般的に研究し、一切の社會科學の基礎或は地盤となると云ふ様な意味の、一般社會科學としての社會學なるものは成立し得ない。そうして社會學もヤハリ他のもろくの社會科學と同じく、只社會的現實態の特殊の一方面を對象とし、他のもろくの社會科學と同位的或は同列的な、一の社會科學としてのみ、成立し得るだけである。

此の見解に於ては、一切の社會科學は何れも只一の特殊社會科學としてのみ成立し得るので、一般社會科學と云ふ様なものは、全く成立し得ないことになる。かくて又一切の社會科學は、同列的或は同位的な諸科學として相並立し、相對立するものとなる。此の見解は今日我國の社會學者間にも、カナリ廣く行はれて居る様に思はれるが、併し私は此の見解はジムメルの社會學論の誤解から生まれたものと考へて居る。尙ほ私はジムメル自身も、彼の社會學論の學問論的意義を十分によく了解して居なかつたのではあるまいかと思ふ。ヤ、詳しくは後に論ずる。そうしてかゝる見解からして、相並立する或は相對立する、二つの特殊社會科學としての、社會學と經濟學との交叉點に於て成立する、一の獨立な科學としての經濟社會學の概念が、構成し得られるのである。

(4) 社會的生活或は社會的現實態の全體の最とも根本的基礎的な方面と云へば、夫れは即ち經濟的生活であるから、換言すれば經濟的生活は現實なる社會的生活全體の最とも根本的な、基礎的な方面であるから、之を對象とする經濟學は、一切の社會的學問或は社會科學の根本的、基礎的なものであると認め、かくて經濟學によりて、社會生活全體を根本的包括的に説明し、一切の社會的學問或は社會科學を、結局經濟學の中に總括し、或は包攝して仕舞ふとする見解。此の見解の最とも代表的なものは、マルクス主義唯物史觀或は史的唯物論或は社會學と稱せられて居るものである。そうしてマルクス主義唯物史觀に於ては、經濟的生活なるものは本來社會的なものに

して、社會的でない様な經濟的生活は全く存在しないと、考へられて居るのであるから、其の經濟學なるものは、つまり人間の經濟的社會生活を研究するものと云ふ意味にて、經濟社會學である、云ふことが出來ようと思はれる。

却說私は社會學と經濟學との關係に關する諸家の見解は、少なくとも大體上右に述べしが如き四部類に分たれると思ふ。そうして私自身は大體上(2)の見解をとるものであるが、併し夫れに就て此處に注意して置きたい點がある。夫れは(2)の見解をとる歐米諸國の社會學者や經濟學者も、一の哲學的學科としての社會學、即ち嚴密には社會哲學と稱せらる可きものと、嚴密な意味にて、一の社會科學としての社會學との區別を、判然立て、居ないと云ふことである。私は此の區別を社會學方法論上最も重要な又は根本的な方法論的一原理と認めて居るので、此の區別が判然確立されない以上、眞の一社會科學としての社會學を建設することは、到底不可能であるとまで考へて居るのである。此處では此の問題に就て詳しく論ずる暇はないが、要するに私は嚴密な意味にて一の科學としての社會學は、さきに述べしが如く、社會的現實態全體の根本的一般的方面及び包括的一般的方面を、合せて研究する一般社會科學として、建設さる可きものにして、そうして他の一切の社會科學は、毫も哲學的思索を混交しない嚴密な科學としては、社會學を一般的地盤として建設される、夫れ夫れの特殊社會科學である可きであると考へて居るのである。それで私は此處で(1)(3)及び(4)等の諸見解を、一々批判的に吟味して排斥し、以て私の見解を論證したい

と思ふのであるが、併し其の暇はないから、只特に(3)の見解を批判的に吟味して、之を排斥するだけに止め、そうして夫れによりて私が、經濟學は一般社會科學としての社會學を一般的地盤とする、一の特種社會科學であると見る所以、及び經濟社會學なる言葉は、經濟學が其の根本的一方針とす可き社會學の方針を、特に強く言ひ表はす爲めの便宜上の言葉として用ひられるに於ては、別段に不都合はあるまいが、併し社會學の特定の一分科を意味するものであるとか、又は經濟學の特定の一分科を意味するものであるとか、尙ほ又兩者の相交叉する方面を特に夫れの對象とする、一の獨立な科學を意味するものであるとか、云ふが如き意味に用ひられてはならないと主張する所以等を、紙面の許す限り論述したいと思ふ。

三、ジムメルの社會學論の誤解

前節に於て私が(3)としてあげた見解、即ち一切の社會科學は、社會的現實態の何れかの特殊の一方面を對象として成立するもの、かくて何れの社會科學も特殊社會科學であるので、他の一切の社會科學に對して一般社會科學の地位を占める様な社會科學は、一も存在しない。一切の社會科學は何れも一の特種社會科學として、同位的或は同列的に相並立或は相對立するものである。されば特に社會學を、他の一切の社會科學に對する一般社會科學として、建設しようとするのは、一の重大なる方法論的謬見であると見る見解は、さきに諷示して置いた如く、私はジムメル

の社會學論の誤解から生まれたと考へる。尙ほ又私はかゝる誤解の生じたのは、ジムメル自身はまだ十分に、彼の社會學論の學問論的意義を了解して居なかつたか、又は十分に判然と之を論述して居なかつたが、爲めであらうと思ふ。此處で此の事を詳しく論述する暇はないから、極簡単に愚見の要旨を述べるだけに止める。

今ジムメルの社會學論の主張の要旨を、出来るだけ簡単に言ひ表はせば、左の如きものであらうかと思ふ。即ち社會的現實態の全體を總括的に研究すると云ふ様な科學は、科學の方法論上成立し得ない。總ての社會科學は、只社會的現實態を、何れかの角度から、或は何れかの方面に於て、研究するものとしてのみ、成立し得るのである。そうして社會的現實態も總ての他の對象と同じく、形式と内容との兩方面を有するものである。かくて社會的現實態に關しては、夫れの形式の方面を研究する社會科學と、夫れの内容の方面を對象とする社會科學とが、同位的或は同列的に相並立する社會諸科學として、成立するのである。そうして前者が即ち社會學にして、後者が即ち經濟學及び其他の諸般の社會科學である。

私はジムメルが、社會學を一の科學として建設しようとして努力して居た時代の、彼の社會學方法論の骨髓は、根本的には大體上右に述べしが如きものであると思ふ。併し彼が右の時代に唱へて居た處の、右の如き社會學方法論の眞義を、深く十分に了解する爲めには、其後の彼の哲學思想の發達、殊に晩年の生命哲學の思想を參照して、彼の晩年の社會學上の著作、Grundfragen der

Soziologie を精しく吟味することが、肝要であると考へて居るのであるが、此處では只彼は、社會學は社會的現實態の形式の方面を研究するもの、之れに對して他の一切の社會科學は、社會的現實態の内容の諸方面を研究するものと認め、そうしてかゝる意味にて、社會學も、他の總ての社會科學と同じく、一の特殊社會科學として、之れと同位的或は同列的に、相並立或は相對立するものと見て居たと解されて居る、其の見解の誤謬を簡単に指摘し、且つ實際に於て、彼は一定の新しき方面から見て、社會學は一般社會科學として、基礎付けらる可きものなるを闡明して居たのであると見る理由を、ヤハリ簡単に指示するだけに止める。

今シムメルが社會的現實態に就て、形式の方面と内容の方面とを根本的に區別して考察した其の考へ方は、彼の哲學思想の由來から見て、カントの認識論上の形式と内容との區別に基いて、立てられたものであることは明かである。そうしてそうであるとする、カントの認識論上の形式と内容との區別から考へて、先づ第一に、形式に對立するものは質料であつて、内容ではなく、内容とは一定の形式の下に包攝され、整頓されて居る質料に外ならないので、形式を離れては、内容は存立せず、内容は本來形式の下に成立し、本來形式を合せて意味するもの、決して形式と同位的同列的に並立するものでも、對立するものでもないのである。かくて例へば、經濟學が對象とすると云はれる、社會的現實態の經濟的内容なるものは、社會的形式の下に包攝され、整頓されて居る一定の社會的質料を意味するものにして、社會的形式を離れた、或は之を合せて意味

しない經濟的内容なるものは存在しないのである。其の他の一切の社會的内容なるものに就ても同様である。されば社會的現實態の一切の内容なるものは、社會的現實態のもろくの形式、即ち社會的諸形式の下に包攝され、整頓されて居る、もろくの社會的質料を意味するものに外ならぬ。換言すれば社會的諸形式なるものは、一切の社會的内容を通じて一般的に存在するもの、そうして一切の社會的内容なるものは、夫れ夫れ特異な質料が、共通の一般的諸形式の下に包攝され、整頓されて居るものに外ならぬのである。さればジムメルが、一切の社會的内容に共通する、一般的な社會的諸形式を研究する、唯一の社會科學と見る社會學なるものは、一切の社會的内容を夫れ夫れ對象とする一切の社會科學に對して、一般社會科學と稱し得られるもの、又かゝる社會學に對しては、他の一切の社會科學は、特殊社會科學と稱し得られるものであることは明らかである。私が社會學を一般社會科學、其他の一切の社會科學を特殊社會科學と認めようとするのも、根本的には右の意味に於てあるのである。かくてジムメルの社會學論の眞義をよく了解すれば、彼は決して一般社會科學としての社會學の概念を排斥して居たのではなく、否な之れに反して、カントの認識論的形式及び内容の區別の上から見て、一般社會科學としての社會學の概念を、新たに論證しようとして居たと、認めらる可きであると思ふ。

ジムメルの社會學論の眞義は、大體上右に述べしが如きものであるとすると、夫れに基いて、社會學も他の社會諸科學と同じく、一の特殊社會科學にして、かくて一切の社會科學は同位的同

列的に相並立し、相對立するものであると見るのは、彼の社會學論の誤解に基いて立てられた一謬見であることは、明かであると思はれる。そうしてかゝる謬見を固守して居る社會學者や經濟學者の中には、同位的同列的に相並立する社會學と經濟學との相交叉する方面に於て成立し得る一の社會科學として、或は社會學の一分科として、或は經濟學の一分科として、經濟社會學の概念を構成しようとする人々がある様であるが、併しかゝる經濟社會學の概念が方法論上から見て正當でないことは、上に述べし處によりて明白であると思はれる。尙ほ私は此處に、かゝる經濟社會學の概念の正當でないことを、更に實質的方面から見て論證したいと思ふ。

四、限界効用説の社會學的分析

第十八世紀の個人主義的哲學を基礎として建設された古典經濟學は、個人は本來夫れ自身に於て完成せる人間として、社會を離れても夫れ自身に於て生活し得るもの、又如何様にか社會に先立ちて生存し得るものと考へ、かくて經濟的諸法則を最も根本的には、個別個人としての人間と自然との直接關係に於て發見しようとして企だてゝ居た。さればにや古典經濟學が發見したと稱する經濟的諸法則は、根本的には何れも個人主義的考察に基いて、構成されて居ると思はれる。そうして限界効用説もつまりは古典經濟學の一原理を甚だ精妙に、實に數學的にまで展開させたものとして、本來個人主義的性質を具有するものである。かくて限界効用説を根本的或は中心的原

理として、經濟學の諸理論を純理論的に築き上げようとする經濟學者は、一般に經濟現象を根本的には個人主義的に考察して居ると思はれる。そうしてかゝる見地から見れば、經濟學は根本的には社會學から獨立して、成立し得るものと考へられるのは、當然である。尙ほかゝる見地をとる經濟學者中には、經濟學は社會學を地盤として夫れの上に建設する可きものでなく、社會學に先行する一科學であると主張する人々もある。されば社會學は唯一の一般社會科學にして、他の一切の社會科學は、夫れを地盤として夫れの上に建設する可き特殊社會科學であり、そうして經濟學もヤハリ一の特殊社會科學として、社會學の地盤の上に築き上げらる可きものであると、見る見解を主張する社會學者にありては、限界効用の表象の如きものも、結局は社會的生活の一産物であつて、決して孤居獨棲する個人の頭裡に生まれるものでないことを論證する必要は、早くから感じられて居た。そうして此の問題の考究に於て大に興味あるは、千八百九十年代の始めに、米國の學界に於て、社會學者として名を擧げつゝあつたギッディングスト、斬新な思想を續々發表して人々を驚かせて居た經濟學者パットンとの間に、此の問題に關して行はれた論争である。それで私は此處に、右の論争を批判的に考察したいと思ふが、紙面の餘白がない爲め、只ギッディングスの限界効用説の社會學的分析の概要を、The Principles of Sociology 第一篇第二章第四節中に總括的に論述されて居る處によりて(但し詳しくは千八百九十一年 The Publications of the American Economic Association に於て公に於て居る論文 The Concepts of Utility, Value and Cost. 千八百九十四年及び千八百九十五年 Annals of the American Academy of Political and Social Science に於て公に於て居る二論文 Utility, Economics and Sociology 及び Sociology and the Abstract Sciences に於て論述されて居る)示し、

且つ之れに極簡單な批評を加へるに止める。

ギッディングスの論述する處によると、近代主觀的効用説の立て、居る、最初効用と限界効用との區別に就て考察すると最初効用の萌芽的意識が一切の社會關係、一切の團結に先行することは、疑はれない事實である。併し限界効用はさうでない。抑々主觀的効用に於ける快感要素は、微分以上のものであらねばならぬ、即ち意識に對して重要性を有し、度合の差別が立て得られるに足るだけの大きさを、有しなければならぬ、更に快感は主觀的効用の唯一の要素ではない。主觀的効用とは、つまり快感は一定の外部的條件に伴ふもの、即ち一の客觀的効用であると云ふ知識と、結合して居る快感である。夫れは外部的原因に歸屬されたる快感である。此の知的因素が含まれなければ、効用論の全體は瓦解する。と云ふのは此の理論は、感情の變化する諸状態は、其等の諸状態が對應する處の外部的事情に於ける、質的又は量的變化の或度の知識に伴はれて居ると云ふことを、夫れの小前提として、常に暗に前定して居るからである。されば最初効用は、一の外部的原因に意識的に歸屬されたる、一の感知され得る快感であつて、さうして限界効用は一の外部的原因の最後の或は限界的な活動に、意識的に歸屬されて居る處の、一の感知し得られる快感であるのである。尙ほ限界効用は、單に感情としての最初の感情と最後の感情との區別に加へて、同一の原因の最初的作用と最後の作用との區別の知覺をも含んで居るのである。かくて限界効用と社會進化との關係は、最初効用の先行性と同様に明白である。要するに、最初効用の萌芽的意識は、團結に先行するものであるのと同様に、團結は最初の因果作用からの限界的因果作用の辨別に、かくて限界効用の意識に、先行するものであることは、確實であるのである。ギッディングスは更に主觀的費用及び主觀的價值に就て、同様な分析を加へたる後、左の如くに結論して居る。

「始めからして、内の快感及び苦感と、外の團結とは、不可離的に結合して居る。最初効用は團結に先行するが、團結は限界効用、主觀的費用、及び主觀的價值に先行する。此等の限界効用、主觀的費用、主觀的價值等の諸概念によりて企てられる社會の主觀的解釋は、恐らくは完全に吾々を、分析に於てもろくの社會的基礎に、又は時間に於てもろくの社會的始源に遡らせ得ない。社會進化は効用の一切の精練に先行して居る。社會進化の進行中に、効用のもろくの精練が現はれる時、其等の精練は新しき諸因素として社會進化の過程中に入り込み、さうして其の後はより高等な、或は複雑な、多くの社會的發達に先行する。されば此等のより高等な或はより複雑な社會的發達は、併し只此等の社會的發達だが、最も單純な最初効用の考察以上に進める何れかの効用主義的(功利主義的)理論によりて、主觀的に解釋されることが出来るのである。」

右に述べし處によりて考ふれば、ギッディングスは、要するに最初効用は團結に或は社會に先行するが、併し限界効用は社會に後行するもの、私の解する意味にて嚴密に云へば、社會を地盤として生まれ、發達するものと解し、かくて社會學は社會科學の體系上、經濟學に先行するものなること(私の學問論上から見れば、社會學は唯一の一般社會科學であること)を、論證しようとしたのである。そうして其の理由として論述して居ることには、詳細な點や、説明の仕方について私と異なる處は少なくないが、併し大體上に於ては、私は夫れを承認して居る。尙ほ私は、ギッディングスが最初効用は團結或は社會に先行すると考へたのは、まだ此の問題を十分に分析して居なかつたが爲めであると考へる。要するに私は最初効用なるものも、現實な具體的形態に於て考察すれば、ヤハリ社會を地盤として生まれ、發達するものにして、社會を離れ、或は社會に先行して存在するものでないと考へるので(其の理由に就ては遺憾ながら此處で論述する紙面はない)、かくて私はギッディングスよりも更に徹底した意味にて、社會學は唯一の一般社會學であると見るのである。併し夫れはとにかくとして、限界効用なるものは團結或は社會に先行するものでなく、社會を地盤として生まれ發達するものであると認めるに於ては、限界効用説によりて、經濟學は社會學に先行するものであるとか、又は社會學は一般社會科學であるのでなく、ヤハリの特殊社會科學であるので、そうして經濟學は社會學と、同位的同列的に相並立或は對立するものであるとか考へるのは正當でないと思はれる。終りに私は、是れまでに述べ來れる私の見解の正當なるを證明するものとし

て、經濟學者としても亦、社會學者としても著名なるマックス・ウェバーの經濟社會學の概念を、批判的に考察して置きたいと思ふ。

五、マックス・ウェバーの經濟社會學の概念の評價

マックス・ウェバーは社會學方法論に關して公にせる幾多の勞作中の何れに於ても、彼は一切の社會科學の體系を、如何に構成しようとするのかを明かに論述して居ない。そうして夫れが爲めに、彼の大遺著 *Wirtschaft und Gesellschaft* の編纂者が、同書の遺稿を整理するに當つて、如何に困難を感じたかは、同書の第二分冊の始めに、編纂者が加へた緒言によりて察知される。そうして編纂者は、マックス・ウェバーは一切の社會科學を根本的には、抽象的社會學と具體的社會學とに大別しようとして居たと推定して、同書の遺稿を整理した様である。併し此の如くに、一切の社會科學を社會學と總稱し、そうして之を抽象的社會學と具體的社會學とに大別しようとする考へ方は、學問論上正當でないとして、私が排斥して居るものである。尙ほ右の如き考へ方が正當であるとしても、*Wirtschaft und Gesellschaft* の編纂の仕方は随分粗雑であつて、之れに幾多の修正を加へることが必要であると思はれる。併し此の事に就ては此處で論述する暇はないが、とにかく私は、同書の編纂者がマックス・ウェバーの抽象的社會學と見做し居るものは、大體上私の云ふ一般社會科學としての社會學に該當し、又具體的社會學と認め、經濟社會學宗教社會學、法律社會學、支配社會學或は政治社會學等と稱して居るものは、私の云ふ特殊社會科學としての、諸種の社會科學に該當するものと見做し、そうして彼は彼の經濟社會學と見て居たものと、抽象的社會學との關係を如何に決定しようとして居たかを簡単に述べて置く。

今マックス・ウェバーは、一切の社會的現實態を、方法的(實質的にでない)に個人主義的に考察し、一切の社會的現實態を、彼が特に社會的行爲と稱する個人の一定の行爲に分解して、之を根本的に説明することを目標として居たと思はれる。かくて彼は社會學の概念を一般的に規定して、「社會學(此の甚だ多義的に使用されて居る言葉の、此處で了解されて居る意味に於ては)とは、社會的行爲を夫れの意味を明かにして了解し、そうすることにによりて、社會的行爲を夫れの經過或は進み行き、及び夫れの諸結果に於て、因果的に説明しようとする一の科學を意味す可きである」と述べて居る。かくて彼の社會學の中心的概念となつて居るのは、彼が社會的行爲と稱するものにして、隨つて彼の抽象的社會學即ち一般社會科學としての社會學なるもの

は、つまり社會的行爲を一般的に考究するものである。そうして彼は、先づ社會的行爲の概念を一般的に規定して、「社會的行爲とは、一人の行爲者又は多數の行爲者によりて思念されて居る夫れの意味に従ふて、他人の舉動或は動作に結び附けられ、そうして夫れの進行或は經過に於て、他人の舉動或は動作に即して方向附けられて居る様な行爲を意味す可きである」と述べ、次に社會的行爲を根本的に目的合理的行爲と、價值合理的行爲と、感情的或は情緒的行爲と、傳統的行爲との四種類に大別して居る。

マックス・ウェバーは、彼が社會的現實態の中心的事實(特に私の術語で云へば根本的元素的事實)と認める社會的行爲なるものを一般的に右の如くに解し、又之を根本的に分類したる後、社會的關係或は社會的結び付き *soziale Beziehung* とは、つまり一人の社會的行爲と他人の社會的行爲との關係或は結び付きを、意味するものであると解し、そうして之を *branchen ärgtliche Ordnung* とか *Vergemeinschaftung* と *Vergesellschaftung* とか云ふが如き、もろくの典型 *Typen* に區別して論究して居るのであるが、要するに、彼の遺著によりて學び得られる限り、彼の抽象的社會學なるもの、即ち一般社會科學としての社會學なるものは、つまり社會的行爲及び社會的關係或は結び付きの諸典型を、根本的に考究するものであると思はれる。

マックス・ウェバーは右に述べしが如き抽象的社會學を基礎として、具體的社會學即ち諸般の特殊社會科學を建設しようとして居たのであるが、要するに、彼は具體的に見れば、社會的行爲は經濟的行爲、宗教的行爲、法律的行爲、支配的或は政治的行爲等々に大別されるものと見做し、そうして其等の夫れ夫れの社會的行爲の種類によりて、夫れ夫れの社會的現實態の範疇を根本的に説明しようとするのが、即ち諸般の具體的社會學或は特殊社會科學であると考へたと思はれる。かくて彼の經濟社會學と稱するものは、つまり社會的行爲の具體的一種類にして、經濟的行爲と稱せられるものによりて、一切の經濟現象を説明しようとするものを意味するのである。そうして彼は限界効用の法則なるものも、つまり經濟的行爲を目的合理的に方向付ける規則に外ならないものと認めたと思はれる。されば彼は經濟學の外に經濟社會學なるものが、如何様にかして成立すると考へて居るのではなく、經濟社會學即經濟學、或は經濟學即經濟社會學と考へ、そうして又夫れは決して抽象的社會學、即ち一般社會科學としての社會學と同位的同列的に相並立或は對立するものと考へて居たのではなく、抽象的社會學或は一般社會科學としての社會學を、他の何々社會學即ち諸般の特殊社會科學と同じく、一般的土臺或は地盤として、夫れの上に建設される可き一特殊社會科學と考へて居たのであると思はれるのである。私は尙ほマックス・ウェバーの經濟社會學に就て、論述したことが多々あるのであるが、最早紙面がなくなつたから、他日の機會に譲ることとする。(昭和十年十二月二日)